

今昔物語集の成立事情について

——一つの龜報恩説話を通して——

國 東 文 磨

今昔物語集の、從來あまり考えられていないと思われる成立事情の一面について、一つの「龜報恩説話」の性格を通して推論してみたい。

今昔卷九・第十三話に△□人^二父錢^一買^レ取龜^一放^レ河語^一といふ龜の報恩説話がある。この話には、同一話が打聞集・第二十一話、及宇治拾遺・卷十三・第四話にあり、嘗て改造文庫本打聞集の解説において、中島悦次氏がこの三書關係について言及せられている。中島氏の所論については後にふれることにして、まず今昔のこの説話の、卷九の中での特徴を考えてみよう。

さて、今昔のこの龜報恩説話が、直接な^二に憑^一って書かれたかという、いわゆる直接出典の問題は後まわしにして、説話傳播の源はなににあるかといへば、疑いなく「冥報記」を指摘することができる。三卷本冥報記（高山寺本・前田本等）ならば、その上卷第十一話がそれである。法苑珠林・唐法華傳記・弘贊法華傳などに所載のものは、冥報記の轉載である。故に、この説話（だけではないが）は、諸書に散見してはいるが、その源は冥報記にある。

いうまでもなく、冥報記（高山寺本五三話・前田本五八話）はさほど大部の書でなく、既に靈異記に何ほどか影響を與えているものであるが、今昔にも多大の關係をもっている。いまこれを、この龜報恩説話を有する今昔・卷九について一見すると、——卷九は總話數四六話、震旦における「善惡に關しての因果應報」話を收載しようという意圖のもとに編まれた卷と見ることができ。そのうち、はじめの十二話は善因善果としての孝子説話が收められており、これらの説話源は孝子傳・烈女傳などであるらしい。が、その後^二に續^一く第十三話以下第四十二話までの話は、第二十話を除いて二九話が連續して冥報記所載の説話と關係をもつものである。その關係についてさらにいへば、第十三話（龜報恩説話）及び第十八話（草慶植説話）を除く二七話は、明瞭に冥報記を直接出典としたものである。その冥報記が前田本系のものであるということは、すでに片寄正義氏が詳細に考察されており、冥報記の中・下卷の説話がその出典となつてゐることがわかる。即ち、今昔のこれらの説話は、冥報記（前田本系のもの——以下引用する冥報記はこの系統のものをさす）を座右においての翻譯——

——といっても、單なる書き下しではなく、平易な口話的意譯的なものであるが——ということが出来る。これを、いまかりに今昔第十三話（龜報恩説話）のつぎの第十四話、第十八話（韋廩植説話）のつぎの第十九話の一部を引いて、簡単に例示すれば

○今昔・第十四話ハ震旦江都孫寶行冥途濟レ母活語V

今昔・震旦ノ江都ニ孫寶ト云フ人有ケリ。若クシテ死シテ。其ノ身尚暖ニシテ四十餘日ヲ經タリ。遂ニ活テ自ラ語テ云ク。我レ始メテ死セシ時人來テ我ヲ捕ヘテ官曹ノ内ニ將至ル。見レバ死タル我が母其中ニ有テ苦ヲ受ク。孫寶此レヲ見テ。且ハ母ヲ見テ喜ブ。且ハ苦ヲ受クルヲ見テ悲ブ。母孫寶ヲ見テ云ク。我レ死テヨリ後久ク被レ禁テ。聊苦ミ息ム事無シ。我レ自ラ訴ルニ力不レ及ト云フ。（下略）

冥報記・中卷

江都孫寶本是北齊人隋末徒居焉少時死而身暖經四十餘日乃蘇自説初被收詣官曹内忽見共母在中受禁寶見悲喜母因自言從死已來久禁无進止无由自訴（下略。古文字の一部を改む）

——右二書において、今昔は冥報記の傍線箇所を除いては、さきにのべたような意味での翻譯といひうる。傍線箇所は主人公の出身を示す語で、説話内容に關係がなく、今昔は故意に切り捨てたと見るものである。

○今昔・第十九話ハ震旦長安人女子死成レ羊告レ客語V

今昔・震旦ニ長安ノ市里ノ風俗。毎年ノ事トシテ元日以後ニ互ニ飲食ヲ儲テ相激ス進テ傳座ス。而ルニ東ノ市ノ筆工趙士次ニ當ニ此レヲ設クベシ。客有テ先ツ來テ剛ニ行テ。其確ノ上ヲ見

ルニ一人ノ童女有り。年十三四許ナルベシ。（下略）

冥報記・下卷

長安市里風俗毎歲元日已後通作飲食相激前爲傳坐市筆工趙士次當設之有客先到如剛見共確上有童女年可十三四（下略）

——右二書には明らかに翻譯的關係がいひうる。

このように冥報記を直接出典とする翻譯の説話は、今昔・卷九のみでなく卷六・七にも存在しており（冥報記の上・中・下所收のもの）、冥報記の大半は今昔・卷六・七・九の主要出典となっている。今昔のこの三卷には、また當時渡來の「三寶感應要略録」も主要出典となっており、この二書は今昔震旦説話の主要出典として重要視されるのみでなく、今昔の震旦説話の、さらには佛教部説話全體、その上にまた今昔物語集全體の組織および説話配列様式などを決定する上に、重要な役割を果しているのである。このことの主要は、すでに筆者が他稿に發表した通りである。而して前述のごとく、冥報記中・下巻説話のうち、説話の内容上、今昔・卷九の類聚性格（前述）に適應するものが、今昔編者の説話展開様式に準じて翻譯的にとられたものが、さきに示した第十四話等の二七話である。冥報記三卷の説話で、卷九の類聚性格に應じないものは、卷六・七にこれらも翻譯的に適宜収められている。今昔・卷九は冥報記とはば如上の關係を有し、その二七話が翻譯的に殆んど連續している。そこで問題になるのは、第十三話および第十八話である。この二話はさきにもふれたように、冥報記所載説話と關係がある。即ち、説話内容は同一である（前話は冥報記上巻、後者はその下巻）。故に卷九のこの二話は、源流が冥報

記であることはいうまでもないが、翻譯的説話の連續する列の中にあって、この二話は決して翻譯ではない。即ち、直接出典として冥報記を指摘することができないものである。二話を冥報記と比較してみれば、翻譯的説話のあり方と大きな相違を見ることができよう。當面、第十三話（龜報恩説話）を冥報記説話と並記してみる。

○冥報記

楊洲嚴恭者本衆洲人家富於財而先兄弟父母愛念恭言无所違陳、太布建初恭年弱冠請於父母欲得錢五万、往楊洲市場父母從之恭乘船載錢而下、去楊洲數十里許江中逢一船載鰲將詣市賣之恭問知其故念鰲當死讀誦請贖之龜主曰我龜大頭別千錢乃可恭問有幾頭鰲有五十恭曰我正有錢五万願以贖之龜主喜取錢付鰲而去恭盡以鰲放江中而空船詣楊洲其龜主別恭行十餘里船沒而死是日恭父母在家昏時有烏衣客五十人詣門寄宿并錢五万付恭父曰君兒在楊洲附此錢歸願依數受之恭父恠愕疑恭死因審之客曰兒无恙但不須錢故附歸耳恭父受之記是本錢而皆水濕留客爲設食客止明且辭去後月餘日恭還家父母大喜既而問附錢所由恭答无之父母說客形狀及付錢月日乃贖龜之日於是知五十客皆所贖龜也父母驚歎因共往楊洲起精舍專寫法花經徒家楊洲家轉富大起房廊爲寫經之室莊嚴清淨供給豐原書生常數十人楊洲道俗共相崇敬號嚴法花里（以下は後日譯で、今昔と無關係のため略す）

○今昔・卷九・第十三話ハ□人以ニ父錢一買ニ取龜放レ河語
今昔。天竺ニ一人ノ人有テ。財ヲ買ハム爲ニ錢五千兩ヲ子ニ令レ持テ隣國ニ遣ル。子然レバ錢ヲ取テ行クニ。大キナル河ノ

邊ヲ行ク。其時ニ船ニ乗テ行ク人有リ。此子船ノ方ヲ見レバ龜五ツ、船ヨリ頸ヲ指出デ、有リ。此錢持タル人立チ留リテ。其レハ何ゾノ龜ゾト問ヘバ。船ノ人云ク。殺シテ可レ爲キ要有ル也ト。此錢持タル人云ク。其龜ヲ我レニ賣リ給ヘ。買ハムト思フト。船人ノ云ク。無限キ要有テ搦テ釣リ得タル龜也。然レバ微妙ノ直也トモ不レ可賣ト。錢持ノ人手ヲ摺テ強ニ乞ヒ請テ。此ノ持タル錢五千兩ヲ以テ龜五ツ買取テ水ニ放テ去ヌ。錢持ノ人心ノ内ニ思フ様。我が祖ノ財ヲ買ハムガ爲ニ。隣ノ國ニ遣ツル錢ヲ以テ。龜ヲ買テ止ヌレバ。祖何ニ腹立給ハムズラムト思ヘドモ。然リトテ亦祖ノ許ニ還リ行ザルベキニ非ネバ。祖ノ家ニ還リ行クニ。途中ニ人ニ値テ告テ云ク。ソコノ錢ヲ以テ龜買ヒ取り給ヒツル人ハ。不意ニ水ノ中ニシテ船打返テ死ヌト語ルヲ聞テ。祖ノ家ニ返來テ。此錢ヲ以テ龜ヲ買ツル由ヲ語ラムト思フ程ニ。祖ノ云フ様。何デ此ノ錢ヲバ返シ遣セツルゾト。子ノ答フル様。我レ更ニ錢不ニ返奉ラ。其錢ヲ以テ龜ヲ買テ。然々龜ヲバ放ツ。然レバ其ノ由ヲ申サムガ爲ニ返リ參ツル也ト云ヘバ。祖ノ云フ様。此ニ黒キ衣著タル同様ナル人五人。各錢千兩ヲ持テ來テ。此ノ錢也トテナム令レ得ツルガ。濕レテナム有ツルト云フニ。早ウ買テ放ツル龜五ガ。其錢ノ水ニ落入ルヲ見テ。各千兩ヲ取テ祖ノ家ニ未ダ子ノ不レ返ル前ニ。錢ヲ持行テ與フル也ケリ。此レ希有ノ事也。祖モ此事ヲ聞テ此子ヲ喜事無ニ限リ。此レ龜ノ命ヲ生タルノミニ非ズ。極タル孝養也。此事ヲ聞ク人皆此ノ龜ヲ買テ放タル子ヲ讀メ感激ケリトナム語リ傳ヘタルトヤ。

右二話は一讀してもわかるように翻譯的關係にない。翻譯話は、それがいかに口話的意譯的にされたものであっても幾分省略するにしても、直接出典の語順を忠實に逐っている。これにはそれがない。のみならず、兩話の相違の特に著しい點だけを指摘してもまず、個所について冥報記は地名・人名・治世を明記しているが、今昔は地名のみであり、それも前者が「楊洲（州）」『震旦であるにかかわらず、後者は「天竺」となっている。これは重大な相違である。つぎには、前者の「錢五万」・龜の數「五十」・龜の變身「五十人」が、後者ではそれぞれ「錢五千兩」・「五つ」・「五人」となっている。これらの相違も、翻譯說話には見られないものである（前に簡単に例示した第十四話・第十九話参照）。また、說話後半において、結局の事からは兩書同じであるが、冥報記は、△船の沈没後、父母の家に龜の變身である人が訪れ、金をわたし、去って後主人公が歸宅して事情を知るという話の順序になっているが、今昔の方は、△船の沈没後、主人公が歸宅し事情を語ろうとすると、親の方ですでに金を受取っていることや受取った時の様子を話し、事情を知るという順序になっている。このような相違も翻譯說話にはないものである。この外、第十三話が冥報記を直接出典としていない（翻譯でない）という論據は多く指摘しえよう。

さて今昔のこの說話には、はじめに示したように、同一話が「打開集」および「宇治拾遺」にある。而してこの二書の說話は、内容・表現において、今昔說話と非常に強い類似性をもっている。繁瑣にわたるので、あえてその原文引用をさけるが、このことは

兩說話も今昔說話と同様に、冥報記の翻譯說話ではない、即ち冥報記を直接出典としていないということをものがたるものである。

今昔・打開・宇治拾遺三書のこの說話が翻譯でないということについては、改造文庫本打開集の解説において中島悦次氏によって既にいわれている（但し、中島氏がこの說話の源流として考えておられるものは冥報記ではなく法苑珠林である。そして翻譯でないというための具體的論據としてあげているものは、貧しすぎるくらいはあるが）。翻譯でないとする、どういふものか、次にその中島氏の説を引用してみよう。

「――右、三書の話が直接に支那の書物に據つて翻譯したものでなく、すでに或る翻譯書があつて、といふよりは口傳へされてゐた話を筆記したのであらうと思ふ。私は、かうした種類の話の展開が、口から耳への傳誦過程に於てなされたことを疑はないものである。そして宇治拾遺の話は元來今昔物語によつたと云はれるが、今昔と打開との二書を折衷して少々創作化したのかとも見えるほどである。ともかく打開・今昔・宇治拾遺の話は文章の上にそれ／＼異同があつて、三書それぞれ別原本に據つたかの感がされるほどである。そして、注意される事は他の話の比較から見ても打開と今昔とは直接の交渉がないと云つてよいと思ふ。――」（改造文庫打開集三〇～三一頁。傍點筆者）

右の所論中、宇治拾遺を打開・今昔の折衷化と見ることと、三書がそれぞれ別の原本に據つたと見ることとは矛盾することのよう

に思われる。打開と今昔とに直接の交渉がないという點は、筆者

も同意見ではあるが、一方また、三書それぞれ別の原本に據ったと見ることと、三書が口傳えされていた話を筆記したものとするとの間にも、なにかはつきりしない矛盾を覚えるのである。この「別の原本」が「口傳えされていた話を筆記したもの」と考えれば、この矛盾は一應解決するであろう。中島氏はこの論の後の方で、三書について「この話の多くは當時の民間、少くも僧侶社會の間に口うつしで、殆ど一定した話が傳へられてゐたことを推想出来るやうに思ふ。」(同書、三二頁)といっておられるところからして、結局この三説話が「口語り説話」の筆記であることをいおうとされたのであらう。筆者もこの考えにはほぼ賛成する。だが全面的に同意することはできない。筆者はこの三書關係特に宇治拾遺説話と今昔説話との全體的關係についての考えを小稿にして發表したことがあるが、いま右の三説話について筆者の考えを結論的にのべるならば、宇治拾遺・打聞の説話は、口語りのまま乃至はそれにきわめて近い表現をもった説話である。もしそれらに直接出典即ち原本があつたにしても、それは表現上ほとんど變りのないものである。ところが、今昔説話の場合は右と少しく趣きを異にするものと考えられる。

それならば今昔説話はどのような形のものであらうか。

いま今昔全巻の説話にわたつて考察してみると、今昔は二つの著述方法を採用しているように思われる。その一は、漢文で著わされた數種の書籍(和・漢をとわず)を座右にして直接それを口話的意譯的に和文に翻譯するという方法である。——この方法によつた説話は、天竺・震旦・本朝にわたつて佛教説話に多く見出

される。その二は、當時著わされていた「口語り」筆記の説話書を座右にして、今昔獨自の著述方針に従いつつ補填・改變を加えるという方法である。——この方法によつた説話は、主として世俗説話および佛教説話の比較的佛教要素の少い説話に多く見出される。さきに引用した卷九・第十四話(孫實話)等はこの一の方法によるものであり(冥報記の直接翻譯)、第十三話(龜報恩話)および第十八話(韋慶植話)はこの二の方法によるものである。なにゆえにそういふるか。あらためてこれを今昔・打聞・宇治拾遺の三書の龜報恩話比較の上で考えてみよう。

今昔のこの龜報恩話が、冥報記の直接翻譯でないことはすでに明らかにされたが、そうかといつて「口語りのまま」の筆記の形とは考えられない。三書の比較によつてまずこのことから考へて行こう。第一にいろいろすることは、この説話については今昔と打聞とに直接出典關係がないということである。このことは中島氏も斷定的にいっておられる。それには具體的論據は示されていないが、筆者が改めて論據によつて再確認するまでもないと思われる。ところが中島氏はこの二書に宇治拾遺を加えて三書ともが「口語り」の筆記であるといつておられるように思われる一面、宇治拾遺が打聞・今昔を「折衷して少々創作化したのかとも見えるほどである」といつてもおられる。後の方の考えにしても明らかに誤りであることは三書を少しく注意して比較して見ればただちにわかることである。次に二三の語を取出して簡単に指摘してみよう。

三書が同じ事物を記している語について見た場合、宇治拾遺が

今昔・打聞の折衷化として考えてよいものは幾つかある。即ち、それには宇治拾遺の語が打聞によっていると考えられるものと、今昔によっていると考えられるものとの二種にわけられる。

前者の一例――

宇治拾遺……殺して物にせんずる

今昔……殺シテ可レ爲キ要有ル也

打聞……害シテ物ニセムトスル也

この例によれば宇治拾遺は、この語については打聞によつたと考えてよいであらう。

後者の一例――

宇治拾遺……寶を買んために

今昔……財ヲ買ハム爲ニ

打聞……寶カヒニ

この例によれば宇治拾遺は、この語については今昔によつたと考えてよいであらう。

宇治拾遺説話の他の語が、すべて右の二例のような關係において見られるならば、宇治拾遺は打聞・今昔の折衷化と考えるとよいであらうが、次の例の如きはどう説明するか。

○宇治拾遺……舟より龜くびをさし出したり

今昔……龜五ツ船ヨリ頸ヲ指出デ、有リ

打聞……龜五頸ヲ捧ゲタリ

○宇治拾遺……この下の渡にて舟うち返して死ぬ

今昔……不意ニ水ノ中ニシテ船打返テ死ヌ

打聞……不員ニ河中ニテ船ウチ返テ死

他にもこのような例をあげうるが、右の今昔・打聞にある語「五」「ふいに」等が宇治拾遺にないということは折衷化では説明できない。それでは「折衷して少々創作化した」ものとしても、今昔・打聞の両方にあつて、しかも取り去る必要もなく、ある方がかえつてよいと思われるものを除去するということは考えられない。また、

宇治拾遺……さる事なし

今昔……我レ更ニ錢ニ返奉ラニ

打聞……錢返奉ラズ

のような相違にしても、宇治拾遺が他の二書を折衷創作化したというにはあまりにも大きな相違である。とにかく、以上二三の例によつても、宇治拾遺が今昔・打聞の折衷創作化ということは明らかに否定されるであらう。大體、宇治拾遺が一説話を採択する場合に、中のどうでもよいような語について特別の理由もなしにわざわざ「折衷」の煩をあえてとる必要もないと思われる。

ところで一方、打聞・宇治拾遺を取上げて比較すると、この兩者には表現の全體にわたつて同文ともいえるような強い一致がある。そしてその中に些少の語の相違が見られる。兩書の冒頭文を少し引いてみよう。

○打聞……「昔、天竺ノ人、寶カヒニ錢五千。卷ヲ子ニ以セテ遣ル。大河ノ邊ニ錢ヲ以テ行、船ニ乗リタル人來、……」

○宇治拾遺……「昔、天竺の人、寶を買んために、錢五十貫を子にもたせてやる。大きな川のはたを行に、舟にのりたる人あり……」

右の兩文は、。點を附した個所に幾分著しい相違を見いだす外はおおむね同文である。元來、打聞・宇治拾遺には全卷にわたって説話表現上、特にあらわな著述意識をもって書かれたという點がみとめられるわけがなく、また意識的に改良を施したと思われる點もない。こういう表現性格をもつ兩書に、表現上の同文的一致が見られ、一方、些少の相違をもつということは何をものがたるか。そこに些少の相違があるだけに、そしてその相違が、相違せしめる理由のほとんど考えられないものであるだけに、兩説話は「口語り」のまま（あるいはそれにきわめて近い）の姿のものであるといえるであろう。全く同文で些かの相違もないならばあるいはが他の轉寫ということも考えられるであろう。また、同文に近くして些かの相違があった場合、その相違に著述に當つての相違せしめる何等かの理由が考えうるものであれば（その理由は意識してのものでも、無意識になされたものでもかまわぬが）、二書には何らかの書承關係を考えてもよいであろう。しかし、右の例文中の相違語をとりあげてみても、宇治拾遺に打聞・今昔の折衷化が否定されたいま、「寶カヒニ」と「財買んために」「來」と「あり」に何の相違せしめる理由があるだろうか。また「錢ヲ以テ」の挿入・除去に、著述に當つての理由がつけられるであろうか。さらに文末、打聞に「錢川ニ落入ヲ見テ、五龜各千卷ヅ、祖ノ□ニ子歸ヌ先ニ」とあるものが、宇治拾遺では「その錢川に落入をみて、とりもち、親のもとに子の歸らぬさきに」となっており、その「五龜各千卷ヅ、」の有無についての著述理由に至っては全く考えられない。このように書承としては考えら

れない些少の相違語の存在する反面に、表現上の全面的一致が全文にわたって強く指摘できるということは、兩説話が共に「口語り」をできるだけ忠實に記録した姿のものと考えざるをえない。即ち、ある時に成立した「口語り」説話が、口語りによって傳承されている中に、幾らかの語の變化が生ずる。しかし「口語り」である以上、全體的には語句の瓊末の點にまで當初の表現をもち續ける。そういう傳承過程の別々の時處において記録したものがこの兩説話の姿であつたと思うのである。たとえこの兩説話に何等かの出典（原本）があつたにしても、それはやはり右に述べたところのものである。故に、打聞・宇治拾遺のこの二説話は、「口語り」のまま（あるいはそれに近い）の説話と考えてよいと思う。ところが今昔の説話は少しこれと異なる。比較上、その冒頭の部分を再度示してみよう。

「今昔。天竺ニ一人ノ人有テ。財ヲ買ハム爲ニ錢五千兩ヲ子ニ令レ持テ隣國ニ遺ル。子然レバ錢ヲ取テ行クニ。大キナル河ノ邊ヲ行ク。其時ニ船ニ乗テ行ク人有リ。此子船ノ方ヲ見レバ、……」

この傍線を附した語は打聞・宇治拾遺に見えない。この語の今昔における存在理由が考えられるであろうか。——まず、表現を全體的に見た場合、今昔は打聞・宇治拾遺に相當近いものをもっていることがわかる。右の傍線語をとりのぞけば、部分的には打聞に近い個所も、宇治拾遺に近い個所もあるが、ほとんど同文といえる程のものである。打聞・宇治拾遺が「口語り」のまま（あるいはそれにきわめて近い）の説話であると見うるならば、この

傍線箇所をかりに考えないとすると、これもまたそういうものであるといつてよいかも知れない。故に、今昔のこの説話は打聞・宇治拾遺に非常に近い「口語り」説話を傳えているということが出来る。しかし、その「口語り」説話は打聞や宇治拾遺のいずれとも少しくちがうところのもの——ある箇所は打聞に、ある箇所は宇治拾遺に近いもの、即ち説話の口語り傳承過程において前二者とは幾分ちがった表現をもったもの——である。

ひるがえって傍線語を見ると、これら打聞や宇治拾遺にない語は、決して口語りの傳承過程においていわば自然に生じたものではないといふのであろう。即ち、これらの存在には相當はつきりした理由が考えられる。それは、これらの語を補填することによって、説話に一層合理性を加え、また著述説話としての重厚性をもたせようということである。「口語り」そのものとすれば、これらの語のあることはかえって凝滞性をもたせ邪魔である。

説話にこのような合理性・重厚性を附與するということは、今昔の編述方針として選んだものの一つである。編述方針にはこの外、史實性・公的記録性の尊重方針、教訓性の尊重方針など種々あって、それらにより多くの説話（特に「口語り」説話）に語の補填・改變が行われているのである。一例をあげれば、説話中に年代・治世・人名・官名・地名などを補ったり（補いえない時は空欄をこしらえておいたり）、説話末に教訓語を補ったりしている。このような補填・改變を行なう場合、「口語り」のままを、記述してゆくと同時に行なうことは困難であらう。今昔の他の種々の説話についてみても、いくつかの「口語り」説話を集めて一説

話に構成したと思われるもの、一つの「口語り」説話を分けて二つの説話に構成したと思われるものがあるが、それらの編述過程と同様に、補填・改變を行ないうるには何等かの先行説話書の存在が豫想されるのである。

この先行説話書は、前述した所から見て打聞・宇治拾遺と同文に近い表現をもつ「口語り」筆記の姿をもつものであったと思われる。そしてそれは今昔よりかなり以前に記述されてあったものでも、また今昔の直前に記述したものであつてもかまわない。しかしそれがどのような書であるか、現在の段階ではまだ明言することはできない。しかしとにかく、今昔の多くの説話にはこのような先行説話書をもとにして編述方針に従いつつ語の補填・改變を行なつたと見られるものがあり、卷九・第十三話龜報恩説話もこの中の一つなのである。即ち、この説話は冥報記の翻譯でもなければ、單なる「口語り」筆記でもない。しかしながら、系統の上からいえば「口語り」につながるものである。

卷九・第十八話も右と同様の説話である。論のついでにその姿を一瞥してみよう。——この説話の源流は冥報記下巻にある。

ハ草履植なる者が娘を亡なつて後遠國へ行こうとし親族を集めて送別の宴をひらくが、その馳足に羊を買う、これを殺そうとする前夜、妻の夢に娘が現われ泣いて訴う、その訴えて母の驚く個所を

○冥報記……來見母涕泣言曰兒嘗用物不語父母生此業報今受羊身來償父母明日當見殺有（青）羊白項者是特願慈恩垂乞性命母驚悟且而自往觀羊畢果有青羊白項……

○今昔ハ震旦章慶植殺ニ女子成ヒ羊悔悲語V……

母ニ向テ泣テ云ク。我レ生タリシ時父母我ヲ悲愛シテ。萬ヅ心ニ任セ給ヘリシカバ。祖ニ不レ申シテ恣ニ財ヲ取り用ヒ亦人ニ與ヘテ。盜犯ニハ非ズト思テ祖ニ不告申一リシ罪ニ依テ。今羊ノ身ヲ受タリ。來テ其報ヲ償ハムガ爲ニ明日ニ來テ被レ殺ナムトス。願ハクハ母我ガ命ヲ免シ給ヘト云フト見テ夢覺ヌ。哀レニ思フ事無ニ限リ。明ル朝ニ母飲食ヲ調フル所ヲ見レバ。青キ羊ノ頭白キ有リ。……

兩話はこの限りにおいては事がらとして特別に相違する所はない。今昔が冥報記の翻譯として特に口語的意譯的にしたと見てもさして不都合はないようである。しかし前に見た翻譯說話の例からすると、些か意譯にすぎ語が多すぎる感がするであらう。とくに今昔の傍線語の個所は全く冥報記にない。

……母にいふやう、「わがいききて侍りし時に、父母われをかなしうし給て、よろづをまかせ給へりしかば、おやに申さで物をとりつかひ、又人にもとらせ侍りき。ぬすみにはあらねど、申さでせし罪によりて、いま羊の身をうけたり。きたりてそのはうをつくし侍らんとす。あす、まさにくびしろき羊になりて殺されんとす。ねがはくは我命をゆるし給へ。」といふとみつ。おどろきて、つとめて食物する所をみれば、誠に青き羊のくび白きあり。……(宇治拾遺)

この文と今昔のとを比較してみれば、今昔は表現に固苦しさ―著述性が加わっているが内容的に全く一致する。これには今昔の傍線語の個所が同じように存在する。この文は宇治拾遺・卷十三

第七話のものである。宇治拾遺のこの話は冥報記を源流としつつ、すでに「口語り」化されていたものであり、今昔はこの說話については龜報恩話と同じく、冥報記の直接翻譯という方法をとらずに、宇治拾遺のような「口語り」となっていた先行說話書に憑って補填・改變を施したものであるといふことができる。

以上で、今昔卷九・第十三話・第十八話の傳承上の性格を明らかにし得た。問題は次に移る。――それなら、この第十三話・第十八話を除いてはば連續して存在している二七話が冥報記の翻譯說話であるのに、なぜこの二話だけが翻譯でなかったのか。――この疑問を解決しなければならぬ。これの解決は、今昔を次のべるような成立事情をもつものであると推論することによってはじめてなし得られるであらう。

今昔の成立事情、それはこのようなものであったらう。――今昔編述の當初の考えは、當時朝野に廣く行われていた「口語り」說話をできる限り蒐集しようとしたのである。そのため、すでに成立していた「口語り」筆記の說話書を集めたであらうし、あるいはまたこの時に筆記したものもあつたであらう。何のためにそのような事をしようとしたか。「口語り」說話というものは元來相當廣い階層にわたり普遍的興味・關心を持って迎えられるものであるが、それとともに何等かの教訓性を藏しているものが多い。說話をその二面にとらえ、興味のうちに教訓教養を行なう書を作ろうとしたのであらう。そのためには、もともと教訓性のないような說話をも教訓のものとし、說話末に教訓語を附すること

を取てし、全説話を何等かの教訓教養のものに統一している。

このような目的を以て「口語り」説話を蒐集している中に、唐書の翻譯説話も加えようということになり、やがて内外説話の集大成に成長していった。説話数が老大になるとともに、類聚・組織化の必要が生じる。その組織化に當つては、新舶載の三寶感應要略録に示唆され、また從來親しまれてきた冥報記をも參酌することにより組織の大綱が決定する。まず佛教部と世俗部に大別すること、ついで佛教部は三國にわち各々佛・法・僧の部立にしその上に三寶禮讃部と因果應報部を設けること、世俗部はおおむね右に準ずるとともに世俗説話独自の組織法を加味すること、そして各説話は話の性格などにより二話ずつ一括して連鎖的に展開せしめることなどである。^(註1)

ところで右にのべたように、今昔編述の當初は「口語り」説話の蒐集であつた。人々の普遍的興味・關心にもとづいて教訓教養を行なう目的に對しては、「口語り」説話が適合する。それゆゑ、翻譯説話を加えるようになって、翻譯はできる限り「口語り」表現に近づけようとしている。このように「口語り」性を重視しながら、前述のように、「口語りのまま」の表現を採用せずして、ある方針にもとづいて語の補填改變を行なっている。この方針というのが説話の合理性重厚性の尊重方針であり、史實性公的記錄性の尊重方針であり、また律令國家主義的方針などである。

こういう方針による補填改變にはいかなる意味があるか。勿論説話を著述のものとするという意味もあるが、その上にさらに重要なことは、「口語り」説話に「權威づけ」を行なおうということである。

とである。今昔編者は、蒐集した説話についてその「口語り」性は尊重するが、それをさらに權威化し、公的性格をもった説話にしようとしたのである。「口語り」説話に公的性格という裝備を加えた上で、一層重々しく前述のような組織の中においた。このことは結局何であるか。――説話の中央集權化である。このように見てくると、今昔編者は「口語り」説話を蒐集し、翻譯説話も加え、説話の中央政府版、總本家版ともいうべきものを造ろうと試みたのではなからうかと思うのである。この邊からも編者を考える方向が示唆されるように思われる。

今昔がこのような成立事情をもっていることは、やがて卷九第十三話・第十八話だけが冥報記の翻譯でないという疑問をとくことになる。

第十三話は、源流は冥報記にありながら、すでに原本をはなれて「口語り」として流布していたものであつた。原本冥報記の説話の方はさきに示したように、元來法華經靈驗禮讃説話である（ゆゑに法華傳關係の書に收載されている）。「口語り」化されたものは經典説話の要素を失い、ただ龜報恩説話となっている。今昔はこの説話をあくまで「口語り」化されたものの形において生かそうとした。編者はこの原話が冥報記にあることを充分に知っている（組織を考える上に多くこの書に負い、翻譯説話をこの書三卷から多數とり出していることを見ても）。しかしこの説話を翻譯で生かそうとすれば卷七に入れなければならない（卷七の法華經靈驗禮讃説話群の中には、冥報記上巻中のそのような性格をもつ説話が翻譯の形でとり入れられている）。それをあえてしな

かったのは「口語り」尊重方針によるものであるといいうるであらう。ではなぜ巻九に入れたか——巻九は前述のように因果應報説を収める巻であるが、佛教性は稀薄である。むしろ因果説話とはいいながら、一般的世俗的教訓性に重きがおかれてそれに應ずる説話が集められている。第十二話までの孝子傳に關係をもつ因果説話もそうであるが、それに續く主として冥途・轉生に關係をもつ因果説話にしてもそうである。そしてそれに適應するものを冥報記に求め(冥報記の中・下巻にその性格に適應するものが多い、翻譯によって入れていったのである。「口語り」化された「龜報恩説話」も一般的世俗的因果教訓の説話となっており、巻九に収めることにしたのである。そして冥報記中巻の「孫寶」話と内容の一致を求めて二話一類のものとして相並べ——龜報恩説話を第十三話、孫寶話を第十四話とした。その一致する内容は兩話共に孝子話であるということであり、孫寶話がもつ他の内容的要素である「冥途」の存在が、やがて次の二話(十五・十六)に移る橋懸り(話類間の契機)となるので第十四話の位置をしめ、龜報恩話の方は第十二話との間に「旅行」ともいへべき契機をもつので、第十三話の位置をしめたのである。故に、第十二話までの孝子説話は、孝子傳關係のものであったが、第十三・第十四は冥報記關係の孝子説話として、孝子説話が第十四話まで續いていることになり、そしてその第十四話から一轉して冥途説話の性格のもの(主として冥報記翻譯による)となってくるのである。

ところで、「口語り」化された龜報恩説話は、話の主人公がいづし「天竺の人」として傳えられていた。にもかかわらず、こ

れを「震旦部」に収めたのは、今昔編者は冥報記にこの説話のあつたことを知っているがゆえである。知りながら、「口語り」尊重方針から一應そのままにして收載した。しかし、これの題目撰定に至って迷ったにちがいない。「口語り」の形のものに準じて題目を「天竺人以父錢……」とすれば、震旦部説話の題目としては都合が悪い。本文の方を改めて冥報話により「泉州の人」とでもすればよいかも知れぬが、とにかく「口語り」の形のままで「天竺の人」として収めてある。止むをえず題目だけ假りに「人……」としておいたのであらう。今昔は、地名・人名・官名などの個有名詞で不明なものを□として空欄にしておくことが多い。不明の多くの理由は、元來「口語り」の話の中では傳えられていなかったものを今昔で採りあげて、それが個有名詞に當るものであることを示そうとするからであつて、このことは今昔の史實性公的記録性尊重方針による補填・改變の一つの表われであると共に、將來空欄を充たす意のあることもうかがわれ、今昔が未完成作品であることを示す一つの例でもある。

一方、第十八話韋慶植説話についても、今昔編者はこれが冥報記下巻にあることを知りながら「口語り」の形のものを採った。

ところがこれには龜報恩説話の場合より一層、史實性記録性重視のための補填・改變に意をそそぎ、そのため座右の冥報記によりそのことを行っている。即ち前にも考えたように、今昔のこの説話は冥報記の翻譯とせず、全體としては宇治拾遺のような「口語り」説話に憑っているが、冒頭の部分に特殊な形が見出される。

○今昔「今昔。震旦ノ貞觀ノ中ニ魏王府ノ長吏トシテ。京兆ノ人

草ノ慶植ト云フ人有ケリ。一人ノ女子有リ。其形チ美麗也。而ルニ幼クシテ死ヌ。父母此レヲ惜ミ悲ム事無ニ限リ。其後二年許ヲ經テ。慶植遠キ所ヘ行ムト爲ルニ。親キ一家ノ類親等ヲ集メテ。遠キ所ヘ可ニ行ク由ヲ告グ。食ヲ儲テ此等ニ備ヘムト爲ルニ。家ノ入市ニ行テ一ノ羊ヲ買ヒ取テ持來レリ。殺シテ此レヲ備ヘムトス。其母前ノ夜夢ニ。死ニシ娘青衣着テ白キ衣ヲ以テ頭ヲ裹テ。髪ノ上ニ玉ノ釵一雙ヲ差テ來タリ。此レ皆生タリシ時ノ衣服飭リ也。」(以下前掲文に續く)

○宇治拾遺「いまは昔、唐に、なにとかやいふ司になりて、下らんとする物付き。名をばけい。そくといふ。それがむすめ一人有けり。ならびなくをかしげなりし。十餘歳にして失にけり。父母かなしむ事かぎりなし。さて二年計ありて、あ中にくだりて、したしき一家の類はらからあつめて、國へくだるべきよしをいひ侍らんとするに、市より羊を買とりてこの人々にくはせんとするに、その母が夢にみる様、うせにしむすめ、青き衣をきて、しろきさいでしてかしらをつゝみて、髪に玉のかんざし一よそひをさしてきたり。いきたりしをりにかはらず。」(以下前掲文に續く)

右二文を比較すると、今昔にあつて宇治拾遺には全く見えない語がある。印の主人公に關する年代・地名などである。主人公名は宇治拾遺が「けいそく」、今昔は「草ノ慶植」である。今昔のこれらの語は冥報記によつておぎないうる。

○冥報記「貞觀中魏王府長史京兆人草慶植有女先七韋夫婦痛惜之後二年慶植將聚親實令家(宰肉)高山寺(備)食家人買得羊未

殺夜慶植妻夢其亡女着青裙白衫帛巾頭髮上有一雙玉釵是平生所服者」(以下前掲文に續く)

しかし冥報記が直接翻譯されて今昔になったのでないことは、さきに述べた通りであるし、右にひく文の中でも、今昔の、部分は冥報記になく、宇治拾遺にはある。その他全體として宇治拾遺に近似性が強い。冥報記は前述の意味における補填のために使用されているに過ぎず、結局この第十八話も第十三話と同様に、今昔が「口語り」尊重方針から宇治拾遺のような「口語り」説話を基底として史實性記録性を重視しつつ補填・改變を加えようとする根本方針の上に立つ説話であることを確認しうるのである。

註

1 片寄正義氏「今昔物語集の研究上」三四六頁。第二編第一章第二節「冥報記と日本靈異記・今昔物語集」。

2 拙稿「國文學研究・第六輯・今昔物語集構想論」。この稿の後半部において、今昔佛法部に三國を通じての整然たる組織が見られ、三國各々佛教史・三寶としての歸佛靈驗・因果應報の三部に分かれ、さらにその中で細かい類別方法がとられていることなどを説明表示した。

拙稿「國文學研究・第十三輯・今昔物語集卷八と佛法部組織の成立」中にも別の觀點から、三寶感應要略錄・冥報記が今昔の組織に與えた影響について細説した。

拙稿「國文學研究・第九・十輯合併號・今昔物語集世俗説話(本朝)の巻序について」において、世俗本朝部の組織の根幹に佛教部のそれと相通するものがあることを、註において

示しておいた。

3 前掲拙稿「今昔物語集構想論」。この稿の前半において今昔全篇にわたつての説話展開様式に「二話一類様式V」とも稱しうべきものの存在することを指摘した。即ち今昔においては全説話がおおむねある内容的契機をもって二話ずつ一括してあり、一括された二話ずつが、またその前・後話と何らかの連想契機をもっていて、いわば連鎖的に配列展開されている。

4 前掲拙稿「今昔物語集巻八と佛法部組織の成立」。巻六・巻七説話における冥報記出典の概要についてふれたところがある。

5 拙稿「國文學研究・第十七輯・宇治拾遺物語と先行説話集」。「同第十六輯・今昔物語集と扶桑略記」。宇治拾遺と今昔などの表現形態の特徴についてのべたところがある。

6 今昔の著述方法を、ここで示したような二つのものに限った点には異論があると思われる。即ち、今昔は「口語り」筆記の説話書以外のいかなる和文の先行書をも座右にしていな——直接出典としていないのかという疑問が残るであろう。伊勢物語・大和物語をはじめとして、諸歌集・三寶繪詞、人によつては大鏡までもが今昔の直接出典と考えられている。特に伊勢・大和は卷廿四・卅所収の説話の直接出典として、從來確實視されているようである。たしかに、そのいくつかの説話は、伊勢・大和の内容および表現において全面的一致の相を見せており、しかもこの二歌物語書が古來親しま

れてきているものだけに、そのように考えられる根拠がある。しかし、結論だけいえば、筆者はこの點に關しては、それらの説話は、歌物語書として當時までに作られてあつたものを出典としたとは考えない。詳細に比較考究した結果、伊勢・大和所収の話が、少くとも今昔成立の頃までは「口語り」として傳承されており、それを筆記したもの、即ち「口語り」筆記の説話を座右にして書かれたものが、今昔の説話であるという考えをもっている。これは本稿で示した著述方法の第二のものである。もちろん、この「口語り」筆記の説話のあるものは、歌物語書としての伊勢・大和の中の話と内容・表現に一致の様相を示すことがある。だからといって、伊勢・大和を直接出典ということはできない。これと同様に他の和文先行書も直接出典として考えられないと思う。これらの點は今昔の性格のみでなく、説話の存在状態を考える上で重要なことと思われるので、稿を改めて詳説するはずである。さらに附言すれば、今昔と大鏡の先後關係について種々論がなされているが、右の私見に關連して、二書の無關係がいいうと思ふ。この問題も後の機會にゆづるつもりである。

7 註2・註6參照。